

組合だより

第167号
2013年
9月5日

発行所 岡山大学職員組合
〒700-8530 岡山市北区津島中 2-1-1
電話 086-252-1111 (代)
7168 (内線)
直通 TEL&FAX 086-252-4148

ホームページ <http://hb4.seikyoku.ne.jp/home/ODUnion/>

メールアドレス ODUnion@mb4.seikyoku.ne.jp

目次 : 1~3 新三役, 学長へ挨拶 3 単組だより (法文経単組) 4 フーテン旅行記 (第11回)

新三役, 学長へ挨拶



この6月で、連合体役員が交代したので、7月26日(金)11時から12時まで、新役員で学長に挨拶に行ってきました。森田学長のほか、許企画・総務担当理事が本部5階、学長室において出迎えてくれました。こちらの参加者は、中富委員長(法)、池田副委員長(理)、荻野副委員長(言語教育センター)、西野副委員長(農)、藤原書記長(理)です。挨拶は、一時間位時間を取って貰い、大学が抱える諸問題、組合が今年度重視している問題について意見を交換するもので、交渉ではありませんので、和やかな雰囲気の中で行われました。



こちらで用意した話題としては、①大学の方向性について、②教育改革について、③森田ビジョンの現段階について、④学長選について、⑤労働条件、厚生福祉政策について、⑥財務についてなどです。

I 「研究大学」としての大学の方向性

「現在文科省は、研究大学20くらいを選定しているところだと聞いているが、現段階でどうなっているか、選定されるとどうなるのか」等について聞きました。

それについては、「27大学がヒアリングに呼ばれて現在結果待ちだが、21大学が選ばれる」とのことでした。「研究が尖ったところとしては、理学部の光合成や超伝導、医歯薬などをアピールしてきた。選定されると10年間で3億ずつ予算がつくことになっているが、これから大学として世界と競争できる種を育成するのに使用

するように言われている」とのことです。(その後、岡大も選定されましたが2億円でした)。

これは理系偏重にならないかとの質問に、学長は、「大学全体のレベルアップも図りたいと思っている。文系も応援したい」とのことでした。ただ許理事からは、「概算要求等について、例えば医学部では合宿してでも要求を煮詰めてくるが、文系はそうした迫力が不足しているので、その点は努力してもらいたい」とコメントされました。

II 教育改革について

全国の動き、学内の動きについて聞きました。特に、「自民党政権に変わってから、グローバル人材、研究大学等々、格差助長政策がラディカルに進められているのではないか」ということについて聞きました。これに対し、「民主党政権時代は、削減圧力が強かったのに対し、自民党

になってから頑張りなさいと後押しされているようでやりやすくなった」との感想が述べられました。



また、「グローバルだ、即戦力だ、高校教育のやり直しだ、地域実践力だと、高校がやるべきこと、企業がやってきたことまで、大学に求められ、要求が多すぎるのではないか、学生は未消化にならないか、専門性に根を張りきちんと思考できる学生を育てるべきではないか」と質問しました。これには、「岡大を語学学校にするつもりはない。学生にとっての多様な選択の一つとして、大学として持っておきたい」との回答がありました。それに対し、「それにしても、人員にせよ、予算にせよ専門を削ってそれらに取り組む訳で、これだけ大学に要求してくるならば、人員、予算、時間を政府が保障すべきではないか、大学はもっと声をあげるべきではないか」と聞きました。これについて「その通りだが、国大協では、旧帝大の声が大きく、お金の困っていないようだ、国大協には不満がある」との回答でした。また許理事からは、「企業でも、限られた人員でもっと良い製品を作れという圧力の下にあるのだから、我々もそのぐらいの覚悟で頑張らないと社会の理解が得られないのではないかと述べられました。なお、「大学としては総合大学として共通の部分、つまり教養教育を充実させることにより岡山大学として特色を出したい」との言明がありました。これは現在、議論しているところで、十分に学部意向も汲み取って欲しいと要請しました。

Ⅲ 森田ビジョンについて

美しいキャンパス、学都構想などありますが、こちらからは、特にミドルアップ・ミドルダウンについて、それは実行されているか、トップダウンで進められていないか質問しました。

それについては、「そんなことはない、今もある学部の執行部と面談したところだが、旧来よりも、研究科、学部の執行部と話合う機会を多く持っている」という回答がありました。それに対し、「しかし文科省の補助金を取りに行くということになると、結局、それに沿ったように

学部を指導せざるを得ないのではないかと質問しました。許理事からは、「何でもいから補助金を取りに行っている訳ではない、役員で議論して選択して取りに行っているのだ」との回答がありました。

Ⅳ 学長選について

「今年で3年の任期が切れるが、次期、学長選が行われるならば、組合としては、また立会演説の場を設けたい」と協力を要請しました。学長からは快諾を得ました。

Ⅴ 労働条件について

「来年度の給与は元に戻るか？」を確認しました。学長からは「そのはずで、戻らと思っている」と発言がありました。それに対し許理事からは、「そんなに甘くないかもしれない」との予測が述べられました。それに対し、「もしそうなら、大学としての何らかの緩和策を取るつもりはあるか」聞きました。

それについて許理事からは、「この2年間の緩和策は、全国の大学のなかでもトップクラスだったはずだ」との回答がありました。こちらからは、「それは認めるが、退職金については他大学では緩和策も取っている、これも考えるべきではないか。また給与が戻らないようなら、大学独自の緩和策として、キャンパス整備に使っている資金もそれに廻すべきではないかとの声もあるが」と聞きました。これに学長は、「そういう声は届いているが・・・」と、難色を示されました。

Ⅵ 宿舎問題について

職員宿舎縮小の見直しを要求しました。これについて、「耐震基準も満たしておらず、立て替えの予算も来ないので、続けて欲しいという要請はないと思っていた。反発の声が強いので現在見直しを指示しているところだ」との回答がありました。許理事からは、「新規に宿舎を建てる予算がつくとは考えにくいので民間委託をした場合の試算の結果、民間家賃と変わらないレベルになった」と発言がありました。それについては「大学の厚生施設と位置づけて欲しい」と要請しました。

その他にも様々な意見を交換し、学長への挨拶は和やかな雰囲気で行われました。しかし団交は、許理事相手に、厳しくなりそうだと気を引き締めているところです。(文責 中富公一)



～ 学長への挨拶に参加して ～

学長と組合の懇談は委員長報告に有りますので以下は陪席した感想です。

組合と大学執行部の懇談ということなので、何か緊張的な雰囲気のあるものなのかな? と興味津々だったのですが、まったく拍子抜けでした。組合から大学への提起事項は多数ありますし、相互に説得が必要なことも沢山あるでしょうが、中富委員長の発言趣旨も、森田先生や許先生の発言趣旨も、結局は先生方が描く理想の大学に近づくための方法の模索のように思えました。

印象的だったのは許先生の「組合は大学組織が持つ、情報流通の重要な一つのチャンネルと考えている」という旨の発言です。自分は、組合は大学組織員の情報が末端まで直接的に集まる所とっていますが、執行部にとってはそういう直接情報がかえって集めにくい側面もあるのだな、と感じました。日本は民主主義が始まってまだ70年ですし、大学という組織もその程度しか経験がないわけですから、まだまだ経験不足で未完成なのでしょう。大学の経験値や組織力あるいは研究教育の全体的な実力向上は、全員の一致する目標でしょうから、そのためだからこそ労働組合にも、しっかりと見識や行動が求められているのだということを確認して帰ってきました。

(池田 直)

副委員長という立場で学長挨拶に同行しました。多忙なスケジュールの中、1時間とはいえ時間を割いて意見交換の場を作っていただいた森田学長、許理事、人事課の方々にまずは謝意を申し上げます。ただし、教職員の1人として素直な気持ちを述べれば、私は本部棟の5階に行くことが好きではありません。このフロアで話されていることは、私たちが普段感じているリアルでライブなものとは大きく離れているという印象を持っているからです。その印象が強くならなければいいが・・・そんなことを考えながら話し合いに参加しました。

中富委員長が詳しく報告されているとおり、短い時間でしたが色々な問題について話を聞くことができました。職員組合の経験はないと森田学長はおっしゃっていましたが、教職員と対話する重要なパイプとして、職員組合を認めているという雰囲気は確かに感じられました。同行して良かったなと思えたのは、宿舎問題の見直しについて直接考えを聞いたことでしょうか。誰に聞いても「本当に見直すのかよく分からない」という状況でし

たが、トップの意見を確認できたのはひとつの収穫です。こういうことがあるなら本部棟の5階に行くのも悪くないですね。団体交渉では、組合員の声をできるだけ届けたいと思います。

(西野直樹)



<単組だより>

法文経単組 ビール大会報告



法文経単組にて、「恒例」となっているビール大会が7月17日にピーチユニオンにて開催された。このビール大会は、組合

員の親睦と暑気払いを兼ねて毎年前期末に開催されている。今年は、私が準備と司会を担当したこともあり、当日の様子を報告したいと思う。

会は当初6時からの開始を予定していたが、私の不手際もあり、10分遅れの6時10分に開始となった。開会時には、まだ参加者が十分に集まってはいなかったが、最終的には60名以上が集まり、例年以上の参加者数となった。会場には、岡山の地ビールの生ビールサーバーをはじめ、日本酒やワイン、各種ソフトドリンクや食事などが用意されており、参加者はお酒や食事を楽しみながら、親睦を深めていた。また昨年と同様に、歓談時には東日本大震災の被災者支援を行っている団体であるおかやまバトンの学生による活動報告や、ジャズ同好会の学生による演奏も行われ、会を大いに盛り上げてくれた。

他方において、開会のあいさつをされた米山毅一郎法文経単組執行委員長をはじめ、当日あいさつをされた方々が口々に語られていたように、大学が置かれている状況は年々厳しいものとなっている。このビール大会は、親睦を深める場であると同時に、今後組合が活動を展開していくために何をなすべきか議論し、考える場でもあり、当日非会員も含めて参加された方々がその点について少しでも関心を深めることができたのであれば、当日の準備・司会を担当した私としては幸いである。

(福士 純)

ローカル線で行く！フーテン旅行記

第11回 「じえじえじえ!!」

幻の「うに弁当」 三陸鉄道 北リアス線

工学部単組 大西孝

今年度上半期の NHK 連続テレビ小説「あまちゃん」。驚いた時に発する「じえじえじえ!!」という方言が印象的ですが、この作品の舞台である「北三陸市」こと岩手県久慈市は、幻の駅弁「うに弁当」がある町として全国の駅弁ファンにも、つとに有名です。

久慈駅は青森県八戸市からの JR 八戸線と、「あまちゃん」に「北三陸鉄道(通称：北鉄)」として登場する三陸鉄道北リアス線の接続駅です。三陸鉄道は岩手県内の三陸海岸に沿って走り、県北部の久慈から県中部の宮古を結ぶ北リアス線と、県南部の釜石から盛(大船渡市)の間を結ぶ南リアス線に分かれています。いずれの路線も東日本大震災の巨大津波による不通区間が残り、来年春の全線開通を目指して復旧工事が続いています。ただし三陸鉄道は昭和 59 年開業と比較的新しい路線で、高架橋やトンネルで高台の上を走る部分も多く、被害がある程度限定されたため、岩手・宮城・福島各県の沿岸部で壊滅的な損傷を被り、全面復旧のメドが立たない JR 線とは対照的です。

久慈を出た列車は、宮古まで三陸海岸を南下しますが、前述のとおりトンネルが多く、海が見える区間は限られます。しかし、高台の上から眺めが開けるところもあり、三陸特有の入り組んだ海岸線や漁港を見下ろすことができます。漁港の周りには高い堤防が多く、また山側の高台には「避難場所」と書かれた看板があり、津波に対する備えを感じます。

さて、冒頭に述べた「うに弁当」がなぜ幻の駅弁かという点、1日わずか20個の限定生産で、しかも現地でしか入手できないからです。久慈へのアクセスは容易ではなく、私は八戸駅を7時過ぎに出る八戸線に眠い目をこすりながら乗車し、2時間程度で久慈駅に着きました。駅の売店で「うに弁当」(1,360円、2009年4月当時)を入手し、「中身で勝負!!」と言わんばかりのシンプルな包み紙を解いて食した時の感激は言うまでもありません。ウニの炊き込みご飯の上にも蒸しウニがぎっし

り敷き詰められており、付け合せはレモンと漬物だけで、ウニの香りを満喫できます。あまたの駅弁を食べてきました(朝、昼、晩、全部駅弁なんて日も…)が、これほど印象に残った駅弁はありません。

ご紹介したのは震災前の記録ですが、今も久慈駅で「うに弁当」は売られているとのこと。食べたら感動のあまり「じえじえじえ!!」と唸ること間違いありません。なお、確実に入手したい方は事前に予約しておくのが安心です。



久慈駅の様子。小さな駅ですが駅弁ファンにはつとに有名です。「あまちゃん」では「北三陸駅」として登場。



久慈駅で発車待ちの三陸鉄道の普通列車。これも「あまちゃん」でお馴染みの車両です。



列車から眺める三陸の海。高台の上を走る列車からの眺めは抜群です。



これが幻の駅弁、久慈駅の「うに弁当」。包み紙は至ってシンプルです。



「うに弁当」の中身。遠くまで食べに来て良かったと思わせるだけの価値があります。